

文学部専任教授
豊川 浩一

クロートフ先生報告要旨

滞在日程

- 6月26日（金曜日）日本到着、3・4時限、大学院演習・講義に参加
- 6月27日（土曜日）15時~19時、「ロシア研究所」（於：早稲田大学）で報告（テーマ：「皇帝ピョートル大帝：その個性と行政の構想」）
- 6月28日（日曜日）受け入れ教員との打ち合わせ
- 6月29日（月曜日）5~7時、文学部西洋史教員との懇談
- 6月30日（火曜日）受け入れ教員との打ち合わせ
- 7月1日（水曜日）1・2時限・文学部西洋史基礎演習で講義（テーマ：「18世紀のロシア」出席者50名）、4時限、同近代史で講義（テーマ：「18世紀のロシアとヨーロッパ」出席者50名）
- 7月2日（木曜日）4時限・セミナー（テーマ：「ピョートル大帝の諸改革」出席者10名）、5時限・共通選択科目ロシア語の授業の補助
- 7月3日（金曜日）3・4時限、大学院演習・講義に参加
- 7月4日（土曜日）15~18時、「ロシア史研究会」（於：青山学院女子短大）で報告（テーマ：「ピョートル大帝の軍事改革」）
- 7月5日（日曜日）日本出発

セミナー：「ピョートル大帝の諸改革」（7月2日（木）3時限・1094教室）

概要

ピョートル大帝の個性と改革—それは歴史学、哲学、刊行物における論争の伝統的なテーマである。新しい世代の出現と共に、ロシアの歴史的プロセスが生み出したこの巨人の評価は変遷し、この「改造者」の活躍の新たな側面が明らかにされている。ピョートル大帝の業績についての評価は、ロシア人の歴史意識の大きな標識となる支柱の評価ということにはかならないが、大体において単純なものでも確定的なものでもありえない。

ピョートル大帝の評価は考えられるあらゆる方面に広がっている。すなわちロシア最初の教授となったロモノソフにとって「神に似た人間」という評価から、同時代の宗教的保守主義者—すなわち古儀式派教徒であるロシアの教会における古い典礼を支持する人々—にとっては改造者、この世にやってくるアンチキリストという評価にまで広がっているのである。

「改造者」についての評価は、時代とともに、政治状況の変化とともに、年齢とともに変化している。たとえば、白海地方に住んでいる現代の古儀式派教徒たちから、この最初の皇帝に対する否定的な評価を一言も聞いたことがない。そこでは、彼は〔ピョートル1世〕は「アンチキリスト」ではなく、しばしばかわいらしい名前のペトルーシャという名前と呼ばれている。ニューフチャ村の住民である古儀式派教徒チトーヴァは、ピョートル1世について次のように語ったものである。「すべての年輩の人たちの言葉から、彼についてはよい評価が与えられました。最初は、ツァーリが来るぞ、と恐れしました。しかしその後、なにも恐れることはなくなりました」、と。

20世紀の優れた英国の思想家アーノルド・トインビー（1889~1975年）は、文明理論の著者であるが、ピョートル大帝を、すべての時代、すべての民族のもっともすぐれた政治家20人のうちの一人に数え上げた。

「改造者」の個性のスケールの大きさ、ロシア史上における彼の意義は、この刻印となる人物に対する見方が政治的な選択を意味すると言えるほど大きなものである。

ピョートル大帝の個性を理解することは非常に難しい。偉大なロシアの作家レフ・トルストイさえも、ピョートル大帝について長編小説を書き始めたが、結果としてうまくいかず、小説『アンナ・カレーニナ』へと転換し、こちらが成功を博すことになった。ピョートル大帝について書くよりも、愛について書くほうが容易だったのかもしれない。

ロシアの国家史上、まさにこの偉大な改造者のもとで、ロシアは後進性からヨーロッパの列強へと突進を成し遂げた。古代のモスクワ・ルーシの状況から強大なロシア帝国へと突進したのである。

優れた革命前の歴史家C.M.ソロヴィョーフは正しくも次のように指摘した。ピョートル1世の活動はロシアの歴史をくっきりと二つに分けている、と。この言葉は、ピョートル大帝の諸改革の意味を強調している。しかしながら、明らかなように、この歴史家が次のよ

うにロシアの先行する発展に向けて、改革の高度な準備について語るとき、歴史家は過去の現実が反対側にあったことを認めている。「新しい道への必要が作り出された。・・・人々は立ち上がり、街路に集まった。誰かを待っていた。神を待っていたのだ。そして神が現れたのである」、と。より正しく言えば、反対なのである。ピョートル1世が徹底的な改革を始めたとき、人々はその徹底的な改革を待つてはいなかった。改革の始まりにあつては、非難、そして叛乱に遭遇するのである。報告者の考えでは、事実により近いのは、ツァーリの立場・状況の評価が、その賢明な同時代人であるイヴァン・ポソコフによって与えられた次のようなものである。「彼は自身で山の上へと10人以上を引っ張りあげるが、山の下へは百万人が引っ張っているのだ」、と。

まさにピョートル1世は広範囲な国家の改革を始めた。1682～89年、彼以前に実際に支配をしていた摂政ソフィアは、あらゆる状況がそのような環境であつたにもかかわらず、決して改革を行なわなかった。改革の開始の動機およびその成功裏の完遂は、ひとえにピョートル大帝の個性の特異性にあるのである。まさにツァーリ・ピョートル1世は、ロシアにおいて、改革のための最も小さな前提となる改革遂行の機関車であつた。

アーノルド・トインビーは正当にもロシアを別個の世界文明に区別した。文明のロシア・モデルという状況のなかでは、国家権力のピラミッドの頂点に立つ個人のスケールの大きさ、才能、意志の力が大きな意味をもつということ認めることができよう。ピョートル大帝はその人生の道のりの間じゅう、彼によってしっかりと会得された基本方針、考え方の一定の総体—すなわち権力と統治についてのその人固有の考え方—を具現したのである。

権力についての彼の考え方の根本、すなわち改革に沿った連続的な進展の根本には、アイデアの次の総体があつたように思われる。彼は、ロシアを、啓蒙君主であり、自らの臣民にとっては父である君主の無制限な絶対的権力を有する国家にすることを目指した。もちろん彼は、君主制、これこそがロシアにとって最も良い統治形態である、と確信していた。しかし、これにあたって、君主は、彼によってなされた—それに従つてすべての住民が生きることになる—立法の法令全体を指針にしなければならなかつた。その際、君主は新たな立法の唯一の源泉となることを望んだ。ピョートル大帝は、その当時のヨーロッパの哲学的思想に従つて行動していた。すなわち彼は、自らの臣民の「共通の福利」について配慮しなければならない、と考えたのである。

セミナーの効果：質疑応答、意見、感想から

18世紀ロシア全体について理解し、興味を深めることができたのみならず、現代ロシアを知る絶好の機会となつた。具体的にはピョートルと他のロシア、およびヨーロッパの皇帝たちとの違いについて認識を得、ロシアの重要な時代を学べた。また現代の政治との関係について、プーチンの執務室にピョートルの肖像画がかけられているなどの興味深い事例から、一定の影響を受けているとの指摘もなされた。セミナーの効果は題であつた。

授業（セミナーに代えて）：「18世紀のロシア」および「18世紀のロシアとヨーロッパ」（7

月 1 日 (水) 1・2 時限・和泉図書館ホール、4 時限・1093 教室)

概要

18 世紀ロシアの君主たちの支配の有様について判りやすく講義・解説した。

まずはピョートル 1 世の即位から説き起こした。ピョートルが即位した時代のロシアには 2 つの選択肢があった。一つはロシア伝統に道にすがって生きていく方法、いま一つはロシアを改革してヨーロッパと同じ歩みをする方法であった。摂政となる姉のソフィアは前者の道を選んだ。ピョートルは後者の道を選んだ。父アレクセイ・ミハイロヴィチは自分が達成できなかったロシアの改革をその子供であるピョートルに託すことになった。当時としては珍しい名前「ピョートル」に込められた意味は、古代ローマ時代、イエスの第 1 の弟子であるペテロにちなんだ名前であった。また父は子に古代の英雄たちの事績を読んで聞かせるよう臣下たちに命じた。とくにマケドニアのアレクサンドロス大王、古代ローマのユリウス・カエサル、ローマの皇帝コンスタンティヌス 1 世の事績である。彼らの事績を模範として、ピョートル 1 世はロシアをヨーロッパの列強へと押し上げる政策をとることになった。

当時、スウェーデンとの北方戦争を行ないながら、ピョートルは新たな常備軍としての陸軍と海軍の創設を考えた。ピョートルが即位した時代のロシアにはそのための資金が潤沢ではなかったが、ロシアを支配していた農奴制および強大な君主権といういわば後進性を逆手にとって、先の創設を実行していった。その成果が北方戦争の勝利となって結実し、ロシアはヨーロッパの列強の一つとなり、まさに帝国となった。

興味深いことに、ピョートルはその帝位継承について、その出自にとらわれることなく、ロシア国家に如何に奉仕する人間であるかによって決めようとした。実の息子のアレクセイが、父の改革に反対し、軍役奉仕を忌避して外国に逃亡した事件に対し、厳格に対処し、裁判によって処罰・処刑してしまうのである。そして帝位は妻のエカチェリーナが 1 世として継ぐことになった。その後の帝位継承を見ても、アンナ女帝、エリザヴェータ女帝、エカチェリーナ 2 世など女性たちが帝位に上るなど、ピョートルの意図したことが表れている。

セミナーの効果：質疑応答、意見、感想から

学生たちからピョートル時代のロシア、女帝が多く出現した時代背景、当時のヨーロッパの啓蒙主義との関係、など多くの質問がでた。それらに対して、クロトフ教授は丁寧に答えながら、講義内容を深めていった。ロシア最高学府の一つであるサンクト・ペテルブルク大学教授による 18 世紀ロシア史についての最新の研究を基にした講義を聞くことができたのは、学生にとって大きな刺激となった。実際、その後のアンケートからは、講義内容に興味を抱いたのみならず、今後の卒業論文も含めた学生自らの勉強の方向性に多大な影響を与えたことが窺われるのである。